

# リヤド日本人学校における教科指導の実践

前リヤド日本人学校 教諭

神奈川県川崎市立富士見台小学校 教諭 獅々鹿 潤

キーワード：サウジアラビア、複式指導、社会生活環境、音楽科、社会科

## 1. はじめに

サウジアラビアの首都にあるリヤド日本人学校は、児童数10名前後の、世界中にある日本人学校の中でも最も小規模な学校のうちの1つである。当然、日本から派遣される教員の数も5名（校長含む）と少なく、小学部から中学部まで児童生徒の学年を広く有した場合、複式学級及び複式指導を行う必要が生じる。ここでは私が担当した教科における複式指導の実践について紹介していきたい。また、日本とは違う社会環境、生活環境の中で、いかに日本と同等の指導を実践していったかについて、その事例を示していく。

## 2. 教科指導の実践

### (1) 複式指導の工夫と実践

#### ①音楽科における実践

リヤド日本人学校において、2年を1タームとする学習指導計画で授業を進める通常スタイルの複式指導を行うことは非常に困難である。なぜなら、人の入れ替わりが激しく、児童によって学習した内容に差異が生じたり、当該学年で学習すべき内容の授業を受ける機会を逸してしまったりする可能性があるからである。そのような問題点がある本校において、児童が確実に当該学年の内容を身に付けるためには、とにかく全ての単元を余すところなく行い、必要な知識・技能を効率よく獲得できるようにしなければならないと考えた。

そのために、担当教員がきちんと各単元のねらいや、めあてを把握し、1年間を見越した指導計画を立てることが必要となる。例えば1・2年生における年間の指導内容（単元名）は、以下の通り（教育芸術社『小学生の音楽』）である。

1年	2年
うたでなかよしくなろう	うたでともだちのわをひろげよう
はくをかんとろう	はくのとまりをかんとろう
はくにとって リズムをうとう	音の高さに気をつけてうたおう
けんぱんハーモニカをふこう	はくにとって リズムをうとう
いろいろなおとに したしもう	いろいろな音にしたしもう
ようすをおもいうかべよう	ようすをおもいうかべよう
おとのたかさにきをつけてうたおう	
たがいのおとをきこう	たがいの音をきこう
おんがくをたのしもう	音楽を楽しもう

2つを比較してみると、非常に系統立って指導内容・単元が組まれていることがよくわかる。この特徴を生かし、1年間の音楽科指導を行ってきた。指導の際には、例えば1年生単元「うたでなかよしくなろう」と2年単元「うたでともだちのわをひろげよう」を1つの大きな単元と捉え、指導計画を立てた。

このような指導方法をとった場合に問題となるのが、1年の間に全ての内容が終わりきらないことである。ここでは全ての内容を吟味・精査し、軽重を見定めて取捨選択しながら1年で収まるような指導計画を立てるよう

心掛けた。また2年間に渡って同じ内容を学習することになるという問題点も生じてくる。しかし、上の学年の児童にとっては前年度の復習という要素と、初めて学習する下の学年の児童に対するフォローという要素も生まれるので、学年相互のつながりや教え合いといった意味で、結果的に非常に有意な方法であったと言える。特に低学年・高学年共に、鍵盤ハーモニカやリコーダー、この後記載する太鼓演奏など音楽実技練習の場面において、学び合い、教え合う姿が多く見られた。



「太鼓活動」教え合いの様子

## ②太鼓活動への取り組み

また、学年を超えた指導の一つとして、太鼓活動を取り入れた。リヤド日本人学校では3年前の学習発表会で、低学年の発表において、初めて太鼓の演奏を披露した。その後、日本の文化を交流学习の際に披露する一つ的手段として全校で太鼓演奏を行うようになった。一昨年度は低学年高学年それぞれ1曲ずつ覚え、昨年度も同様に1曲ずつ新しい曲を練習した。

前述の通り、覚えた曲は交流会の場において披露した。昨年度はトルコ人学校で催された子どもの日のイベント、サウジアラビアの幼稚園「MY

FIRST STEPS」との交流会、サウジアラビア政府主催の国際児童日祭への出席などで太鼓を演奏し、日本の文化を紹介してきた。また、日本人会新年会や学習発表会「ラカム祭」において、保護者の皆さんや日本人会の皆さんに日頃の練習の成果をご覧いただいた。さらに、昨年度は初めての試みとして、1週間に1時間、合同音楽の時間を設けて太鼓練習を行った(2・3学期に実施)。低学年・高学年それぞれの演奏曲を選定し、教員が2つのグループに分かれて指導を行ってきた。

音楽の授業の一環として太鼓演奏を行うことは、音楽的技能の伸長という点からも非常に有意である。特に低学年においては、一定の速さでリズムを打ったり、他の児童と合わせて太鼓を叩いたりすることを通して、リズム感の素地を養うことができた。また、教員から児童へ一方的に教え込むだけでなく、高学年児童から低学年児童、または同学年児童同士の教え合いの場として、太鼓練習の場が大いに活用され、児童の相互理解やコミュニケーション能力の伸長にも一役かっていた。さらに、新年会や学習発表会など多くの観客が見守る中で太鼓演奏することで、日本人学校の活動を大きく知らせ、リヤドの日本人会の中で欠かせぬ存在であることをきちんとアピールすることができた。

今後、太鼓練習・演奏を続けていく上での課題は、教員や児童生徒の入れ替わりが激しい中で、覚えた演目をいかに次の学年、新しく来た児童生徒に引き継いでいくかということである。いつ交流会があっても太鼓演奏ができるようにするには、これまでに修得した演目を少なくとも1つは全員が演奏できるようになっている必要がある。そのためにも、教員から児童生徒へ引き継がれるものではなく、児童生徒から児童生徒へ引き継がれていくものであるべきだと思うし、これからも学校を挙げて太鼓活動に力を入れていけたらと強く願っている。

## (2) 現地の社会環境、生活環境を踏まえた指導実践

### ①社会科における実践

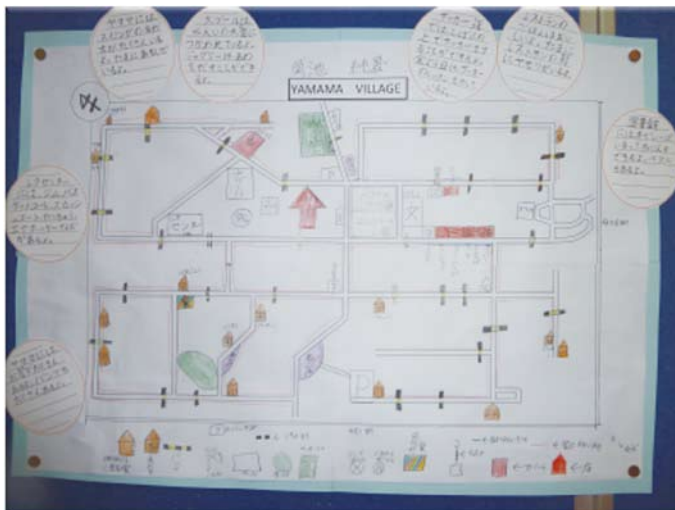
自分の住んでいる地域について学習を行う3年生の社会科単元「わたしのまち みんなのまち」では、まずその校区について学び、その後市町村へと視野を広げて学習を深めていくのが通常である。しかし日本のような学区が存在しないリヤドでは、子ども達は広い町に分散して生活しているので、日本で扱うような「小さな社会」を素材とした学習を進めることが非常に困難であり、指導計画を作成する際に工夫が必要であった。

小単元「学校のまわり」では、まず始めに屋上に上って学校の周囲の様子を観察した。この時、特に意識させ

たのは方位である。平面の世界である地図を読む際に、自分の位置を示したり、何かの位置を言い表したりすることができるよう、4方位及び8方位について触れ、学校を中心に見たときに、周囲の建物や道路などがどの方向にあるのかを考えさせた。次に、自分の住んでいるコンパウンド（居住地）について調べ、絵地図を作成した。コンパウンドにはお店や公園、レストランなど、公共施設となるものもあり、小さな一つの町としての機能を持っている。それらについて白地図上に落とし込み、まとめをおこなった。

もう一つの小単元「市の様子」では教科書を参考に「同じ市内でも場所によって様子が異なる」ことを始めに知り、グーグルアースを使って自分の住んでいた町（今回については奥州市、高松市、横浜市）を調べ、白地図にまとめる活動をした。

どの児童も、調べ学習に対してとても意欲的に臨んでいた。自分の住んでいるコンパウンドに愛着を持ち、進んで調べたり、積極的に新しい発見をしようとしていたりすることができた。また自分の住んでいるコンパウンドと友だちの住んでいるコンパウンドを比較して、同じところや違うところにも目を向けていた。とは言え、日本の3年生が学習するのと同様の内容を学び、同じような知識や技能を身に付けることができたのかどうかについては疑問が残るところである。学びを深める手立てとして教科書に頼らざるを得ない部分は非常に残念に感じている。自分の住む町「リヤド」について、もっと興味を持ったり、調べたりすることができるといったような指導計画を考えることも大切である。



コンパウンド調べ

## ②朝の歌の取り組み

教科書には、日本に古くから歌い継がれ、これからも歌い継いでいきたい歌として、各学年、季節ごとに1曲の唱歌が掲載されている。1年生から6年生まで、すべての学年を合わせると合計24曲もの「こころのうた」が共通教材として載っていることになる。1年を通して暖かい日の多いサウジアラビアでは、季節感を得ることが非常に困難である。季節の変化とそれに伴う自然や生活の変化を肌で感じることは、日本人にとって大変重要なことであり、子どもの頃に記憶された心象が、大人になってからの季節感に活かされることもまた事実である。そこで、それらの「こころのうた」を4月から3月まで担当し、その季節に合った歌を各学級で朝の会に児童が歌うことができるよう計画を立てた。校歌や国歌、年間を通して歌う歌、そして儀式や行事の際に歌う歌と併せて、学期ごとにCDを用意し、それぞれの学級に配布した。

計画を立てる際には、毎月だいたい2～3曲、その時期にふさわしい曲を歌うことができるように配列した。また1曲ずつ教室掲示用の歌詞カードを作ったり、児童がイメージを膨らませながらそれらの歌を歌うことができるよう、月の始めに必ずその月に歌う歌について説明して、歌詞の意味や情景を共有するように努めた。

子どもの日にこいのぼりを掲げたり、七夕で短冊に願いごとを書いたりするなど、季節行事と並行してその季節に合った歌を歌うことで、子ども達の季節感を養うことができた。また、毎日元気よく歌を歌うことを通して、低学年から高学年まで、歌を歌うことに対する抵抗をなくし、積極的に歌と関わろうとする意欲や態度を養うことができた。

昨年度は1年生から6年生まですべての学年が同じ歌を歌った。低学年の歌は高学年にとって、また高学年の歌は低学年にとって、学年の実態に合わない部分もあった。可能ならば技能面や内容面で学年に応じた歌を選び、それによって計画を立てられるとなお良い。

### 3. 終わりに

リヤド日本人学校での3年間、日本とは違う環境の中で何かと不便を感じたり、スムーズに事が運ばなかったりしたことが多々あった。それは日常の生活のみならず、学校における様々な活動においてもまた然りである。しかし、そんな環境を逆手に取り、逆境をプラスに変えて、試行錯誤しながらそこに通う子ども達のために指導を行った日々は、私にとってかけがえのない宝物である。ごくごく小規模な、人数の少ない学校だったからこそ、子ども達一人ひとりと向き合い、その子に合った指導や学習の方法をじっくり考えることもできた。この3年間で得た経験を日本に住む子ども達に還元すべく、今後も尽力していきたい。